龍灯

第１４号

発行所　大阪市史跡　龍溪禅師墓所
霊亀山　九島禅院
〒550 大阪市西区本田３丁目４－１８
☎０６－５８３－２７２５
発行人　住職　奥田啓知（智證）

命名権は仏さまにある！

「悪魔」ちゃん問題

日本中に論議をよんだ『悪魔ちゃん』問題。わが子に『悪魔』と命名し審判事件になったニュースは世間の耳目をさらいました。

東京地裁八王子支部は「昭島市が出生届けをいったん受理したことを理由に戸籍への記載を命じたが、悪魔という名前そのものについては、命名権の乱用で違法に当たる」との審判を下しました。

亡き人の名前（戒名）とはいえ、名前を考えるのは大変苦労します。ましてや、生きているわが子のこと、わが子の将来を考えると、その命名は並み大抵のことではありません。

「一度聞けば忘れない。目立つから」との理由とはいえ、社会通念からみて、子供の将来を考えると、首をかしげてしまいます。「名は体に応じ、体は名に応ずる」という古い諺を持ち出さなくとも、『悪魔の両親』の見識を疑ってしまいます。

そもそも、問題の原因は命名権が親権者（親）にある、子どもを親の所有物と考えるからこそ、このような問題が生じるのです。

仏教の考え方では、子どもは親の所有物ではないのです。昔の人は「子どもは仏さまから授かるものだ」と信じていました最近は、子どもをつくるといいますが、昔はそう言ったものです。

子どもは授かりもの、仏さまからお預かりしているのです。その意味では、親が子どもの名前を独善的に決定せずにおいてむしろ、その決定を仏さまにゆだねたほうがよいのです。

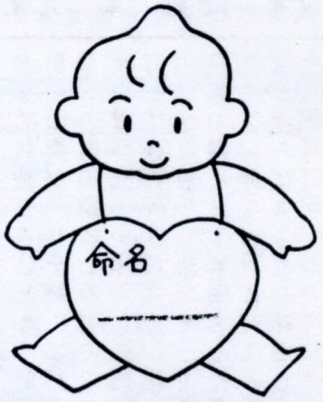
親が、これが最善と信じる名前を子どもにつける。それはそれでいいことですが、それだと親の信念・信条を絶対的に、子どもに押しつけることになります。その信念・信条が間違っていたからこそ、『悪魔ちゃん』になったのです。

しかし、生まれたばかりの子どもは自分の意思を表明できません。それでは、どうすればよいでしょうか。

エジプトでは、子どもに命名するとき、何本かのろうそくにそれぞれ異なる名前を書き込みそれに火をつけ、一番最後まで燃えていたろうそくに書かれた名前を、子どもにつけるそうです。

おもしろい命名法だと言えます。『子どもは、仏さまからの預かりものだ』という意識を、しっかり持っていればこのような問題はおこらなかったのではないでしょうか。

子どもだけでなく、私たちのいのちや身体も、自分のものではないのです。仏さまからお預かりしているのです。「ご自愛下さい」という挨拶がありますが、それは、「仏さまからお預かりしている身体だから大切にしなさいよ」といった意味なのでしょう。それが、仏教でいう『無我』なのです。



フィリピン戦跡慰霊巡拝

戦跡慰霊巡拝という旅があります。先の大戦の戦跡を訪ね、英霊（戦死者の御霊）をなぐさめる旅です。小衲にとって初めての経験で、感慨深い旅でした。

今年は終戦の五十回忌にあたり戦跡慰霊巡拝も、節目の年にあたります。頻繁に行われている南方戦線にくらべ、中国奥地やシベリヤなど、昨今の世界情勢の変化から、これからという地域もあります

去る一月十六日より一週間の旅程で、フィリピンへの戦跡慰霊巡拝に参加しました。

弊師弘忠和尚の姉婿の伊丹常休寺十六代普喜弘道和尚がフィリピンで戦死されています。ご子息の現住職が、しばしば遺族会に参加して渡比、戦跡慰霊巡拝されていますが五十回忌という節目の年ということで、是非にと参加を請われました。

同行には、兵庫県氷上の福田寺の福田千文和尚をはじめ青森県黒石市の法眼寺の野呂徹宗、佐賀県多久市福聚寺の相浦司道、東京都国分寺市の鳳林寺の山本智丈の各和尚様方、そして遺族の方々の総勢十一名でした。添乗の奈良交通観光社の山本光男次長によると『今回は、日本遺族会ほか、九州各地の遺族会、箕面市慰霊団が来ていますが、六名もの和尚さんが参加されたこんな贅沢な巡拝団はないでしょう』とのことでした。

常休寺様は、師父の弘道和尚が中支よりフィリピンに転戦のため姫路に立ち寄った折坊守様に抱かれて姫路に向かったところ、寺族に会おうと帰坊する和尚とすれ違いのまま、和尚は渡比。とうとう会わずじまいのうちに、和尚は戦死。師父の顔もわからない年頃とはいえ、現住職には無念の極みの思いだとのことです。

さて、慰霊巡拝は、マニラから小型バスにて、おもにルソン島北方の山中を廻ってきました。

『アイ　シャル　リターン（私はきっと帰ってくる）』と約束したマッカーサー将軍率いる米軍がレイテ島に上陸し勝利を納め、続いてルソン島の攻防。攻防といっても日本軍には十分な戦備もなく、平野部における地上戦を避けてルソン島奥地の山岳部に入り、長期持久戦を戦い、その分だけ、日本本土に向かう米軍の足を引っ張る作戦にでたのです。

山下泰文将軍率いる日本軍将兵は飢えと病に疲れ果て、四十四万余ともいわれる戦死者を出しながらも、終戦まで戦い続けたのです。

フィリピン北部の山岳地帯は、峻険をきわめ、千五百メートル級の山脈を四つを越える山岳道路は俗に『山下道』と呼ばれ、山下将軍が物資補給用に作らせた道路です。ガードレールはなく、崖も落石が当たり前のような悪路、ジープを改造したバス（ジプニー）が命懸けで通行しています。先年の地震で川に架かる橋は流され、道路か川床か判らない道を、我々をのせた慰霊バスはひたすら走ります。

『やって、きたぞ！』・・・満身の気持ちを込めた、野呂和尚の声がバレテ峠にこだまし、一同の胸にしみます。日米両軍が死力を尽くした処二万七千余の両軍の兵士が砲火のなかに散った処だそうです視界の開けた、素晴らしく景色のよい峠なだけに、そんな話が虚ろにきこえる峠でしたただ風だけが、ヒューヒューと鳴っていました。お経だけ

壊れた橋とその下を通る車

が、慰霊するのではありません。遺族の心からの呼びかけも、遠く異国の地に眠る英霊に届くのです。

バレテ峠を下ると、サンタフェの町。町の公民館は遺骨収集に当たった日本の関係者が建てた建物です。同処の一室に小さな祭壇があり、ここで弘道和尚の五十回忌法要を厳修しました。福田千文和尚の導師で、黄檗宗独特の梵唄（ぼんばい－節経のこと）が小さな堂内に響きわたります。傍らの正弘和尚は汗と涙で感涙にむせび、不肖、仏縁をつなぐ者として、お役にたててよかったとつくづく思いました。

『山ゆかば、草むす屍・』とは、海ゆかばという歌の一節です。慰霊法要は、ラジカセに録音した『フィリピン国歌』続いて『君が代』『海ゆかば』を一同で唱和。そして、お経に入りますが、フィリピンの山野で歌う『海ゆかば』は、万感胸にせまり、異国の地で眠る英霊の声が聞こえてくるようでした。

日米決戦の舞台となったレイテ島、レイテ沖海戦では、同行の福田和尚の弟君、そして相浦和尚のお兄君が戦死されています。マニラへの帰途リンガエン湾岸のダモルテスという小さな町の浜辺で、レイテ島に思いをはせ、追悼法要をしました。『海ゆかば、水漬く屍・』五十年も昔、この静かな海で、大勢の兵隊さんが戦死されたことが嘘のような気がします。かんかん照りの下、一同また涙。見物の村の親子が不思議そうな顔をしていました。海岸の小石を集める。縁者に届けるためです。当院檀家の西山岩男さん（大義院光岩忠照居士）がマニラ湾で輸送船が沈没し戦死されています。同所で塔婆回向を致しました。

帰国を明日に控えた最終日山下泰文大将の慰霊碑、本間中将のお墓参り。両将軍はモンテンルパの刑務所より未明に引き出され、ジャングルのなかで密かに処刑されたとのこと。ご家族の意向で山下大将は小さな慰霊碑に『将軍山下泰文終焉之地』と刻まれたそうです。

マニラから八十キロ、ラグナ湖の畔にあるカリラヤの丘には、日本政府が支援して比島戦慰霊碑が建っています。諸般の事情なのか骨箱をかたどった慰霊碑はなんと貧相なものでした。ここは、毎年日本政府より維持に要する費用が供出されているとのこと。一同、正式出頭装束に着替え最後の合同慰霊祭にのぞみました。式の最中かすかな雨。『ここで慰霊すると必ずといってよいほど雨が降ります』とは、何度も同地を訪れている常休寺さんの言葉です。英霊たちも、お別れを惜しんでいるかのような雨でした。当院檀家の平松謙二（勇猛院忠誠謙道居士）ならびに吾郎（勇進院忠芳吾道居士）、二霊の塔婆供養をしました。

慰霊巡拝の旅では、沿道の小学校に立ち寄り、日本から持参した学用品やカレンダーをプレゼントしました。授業中にも係わらず、どの小学校も先生方が歓迎してくださり屈託のない児童に囲まれました。

戦跡慰霊巡拝、それは心のなかへの旅（インナートリップ）平和な日本で暮らす私たちが決して忘れてはならない貴い石づえに思いをはせる旅なのです。目に見えない、名もなき英霊の声を聞く旅なのかもしれません。

フィリピンでの数々の思い出、たいへん感慨深い旅でした。今回の旅でお世話になりました皆様に厚くお礼申し上げます。

檀信徒の皆さまへ

フィリピンは、とても貧しい国です。お金がないために学校へ行けない子どもたちが大勢います。また、学校の数も足りず、一日に二部授業が行われています。慰霊巡拝の旅では、沿道の小学校に学用品やカレンダーをプレゼントして大層喜ばれました

奈良交通観光社が3月にも渡比されるので、もし、ご家庭に不要なカレンダーや学用品があれば、お寺まで頂けませんでしょうか。同社に託して届けていただく予定です。お彼岸法要の際ご持参くださるか、お月参りの時に頂ければ幸甚です。

奉納抄

本堂内陣襖新調　寄贈
（平成五年十二月）

本堂内陣の襖を新調しました。工事費用の一部に、鈴木ともえ様よりのご寄付を使わせて頂きました。法要後の斎会（精進落とし）の際、ご本尊さまに失礼なく、落ち着くことができるようになりました。厚く御礼申しあげます

編集後記

▼『一月は行く、二月に逃げる、三月は去る』と言いますが、フィリピン慰霊巡拝の旅もあり、アッという間でした。又、春の彼岸が近づいてきました

▼先の晋山・落慶法要ビデオは、おかげさまで完売いたしました。今度の山門会（彼岸法要）で映写会を持ちます

▼龍燈会館の多目的ホールにビデオ・レーザーディスク・カラオケ装置を設置しました。百インチの大画面で観てもらう予定です。また、フィリピン慰霊巡拝の旅の写真を、彼岸期間中に会館一階ホールに展示しますので、参詣のついでに是非お立ち寄りください。

▼十月半ばに、本山で『中国祭り（華僑の普度勝会）』がありますが、団体参拝を考えています。詳細はお盆にご案内いたします。

●ぼんのう川柳○

お檀家さんの奥さんが、ボケ防止にと川柳教室に通っておられます。5・7・5文字にペーソスやブラックユーモアーが込められ、思わず苦笑してしまいます。『ぼんのう川柳』と題して、『万能川柳』（仲畑貴志・編　情報センター）から秀句を選んでみました。

体調の良いときだけ云う死の覚悟

経を読む坊主のうしろで胡座くむ

神棚から紙屑籠へ宝くじ

酒タバコやめたあの人先に逝く

もう急ぐこともあるまい霊柩車

悲しみの最中お気持ち聞くマイク

子の出世親の葬儀で披露され

葬儀屋の手際のよさがなお寂し

遺産わけ行方不明の兄が来る

財産は取り合い位牌ゆずり合う

最高の戒名付けたが墓は荒れ

生きた親拝まず石にして拝む

強く鈴（りん）叩き仏へ言いつける

試しに作ってみませんか！投句をお待ちしています

ご案内

彼岸法要

法話・住職

3月23日（水）
午後1時半より

ご先祖供養です。ご回向のお申込みをお願いします